小川隆行
ウマフリ

競馬 伝説の名勝負

1990－1994

90年代前半戦

競馬がもっとも熱かった時代！

凄い！感動と興奮がよみがえる、
名馬たちの激走史〈全26レース〉

オグリキャップ
メジロマックイーン
トウカイテイオー
ミホノブルボン
ライスシャワー
ナリタブライアン
ほか

競馬 伝説の名勝負 1990-1994 90年代前半戦

小川隆行＋ウマフリ

星海社

192

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

昭和から平成へ元号が変わって間もない１９９０年。競馬界はいくつもの変化を迎えていた。競馬場で騎手や馬へのコールが沸き起こり、オグリキャップという人気者が誕生。同馬を操った天才騎手・武豊が注目を集めた。男の世界だった競馬場に女性客が次々と訪れたことは、競馬の魅力が広がったことを意味していた。

競馬ブームの訪れ。それはギャンブルからレジャーへの変革期だったといえるだろう。

そして、多くの名馬がターフを走るたび、私たちは感情を揺さぶられた。

強豪馬のさらなる強さを観たい。

一歩足りない馬の大駆けに期待したい。

終わったといわれる馬の、最後の力を目にしたい。こうした思いがいくつもの名勝負を生み出し、30年近く経った今も記憶の片隅に残っている。

懐かしき名馬の忘れられぬ名勝負。そのゲートを開いてみよう。

小川隆行

目次

はじめに 3

第1章 空前の競馬ブーム到来！ 1990年 9

1990年 有馬記念 オグリキャップ
日本中にただ1頭の馬の名がこだました！
アイドルホースが、伝説に上り詰めた日 10

1990年 天皇賞・秋 ヤエノムテキ
東京2000mの申し子
府中に咲いた「オグリ世代」の中距離名馬 18

1990年 スプリンターズS バンブーメモリー
あらゆる距離を駆け抜けた
短距離戦の価値観を変えたパイオニア戦士 24

1990年 ウインターS ナリタハヤブサ
冬の中京で目覚めた「砂の適性」
ぽっと出の初ダート馬が初重賞制覇 30

1990年 日本ダービー アイネスフウジン
苦労人騎手への祝福は「日本競馬史上初」
20万人の大観衆からのサプライズ 36

コラム1 アングロアラブ&地方の名馬たち
忘れられない名脇役たち
アラブの大物と世界をめざした地方馬 42

競馬note 1 懐かしき制度 単枠指定 46

第2章 オグリから受け継がれた熱狂 1991年 47

1991年 宝塚記念 メジロライアン
三冠すべてで3着以内
惜敗続きにビリオドを打った「横山典弘の意地」 48

1991年 天皇賞・秋 プレクラスニー
競馬ブームの真っただ中の降着劇
笑顔のなかった天皇賞最年少制覇 54

1991年 オークス イソノルーブル
「逃げ馬&前走1番人気」の妙味
オークスを逃げ切った裸足のシンデレラ 60

1991年 菊花賞 レオダーバン
現役時代のすべてをのせて
一瞬で手にした長距離の栄冠 66

1991年 有馬記念 ダイユウサク
型破りな調教師が見出した型破りホース
「これはびっくり」と実況アナも絶叫 72

コラム1 大波乱の決着
人の行く裏に道あり花の山
万馬券に不思議の万馬券なし 80

競馬note 2 PATの導入で壊滅した「ノミ屋」 84

第3章 時代が生んだ世紀の対決 1992年 85

1992年 天皇賞・春 メジロマックイーン
クラシック馬VS上がり馬
最強馬同士の「世紀の対決」 86

1992年 天皇賞・秋 レッツゴーターキン
「一か八かの勝負勘」
冤罪事件から復活した名手のGI制覇 92

1992年 菊花賞 ライスシャワー
走るたびに成長が見えたアスリート
スーパーステイヤーと呼ばれた馬 98

1992年 有馬記念 メジロパーマー
アイドルホースに負けてたまるか!
歴史に名前を刻んだメジロ第三の馬 104

コラム3 特別インタビュー 早見和真（小説家）
一番好きな馬はツインターボ
逃げ馬に魅了された青年の破滅型馬券 112

競馬note 3 世紀の対決で飛び出した 名実況 118

第4章 「BNW時代」の幕開け 1993年 119

1993年 日本ダービー ウイニングチケット
「この騎手に勝たせたい」――熱い思いが結実
ダービージョッキー・柴田政人誕生！ 120

1993年 菊花賞 ビワハヤヒデ
春の悔しさが菊の大輪となる
新たな芦毛伝説が幕を開けた 126

1993年 エリザベス女王杯 ホクトベガ
「ベガはベガでも…」
スーパー牝馬が激突した秋GI最終戦 132

1993年 ジャパンC レガシーワールド
世界の強豪を下した一戦
菊花賞馬も破っていた史上最強の騙馬 138

1993年 有馬記念 トウカイテイオー
日本中の競馬ファンが涙にぬれた
人知を超えた奇跡の復活劇 144

コラム4 特別インタビュー 的場文男（騎手）
大井の帝王が挑み続けた
中央と世界へ通じる道 152

第5章 怪物三冠馬の登場 1994年 157

1994年 有馬記念 ナリタブライアン
GI5勝目を挙げた4歳馬
三冠馬が輝いた暮れの大一番 158

1994年 高松宮杯 ナイスネイチャ
有馬記念5年連続出走
ブロンズコレクター、涙の重賞制覇
166

1994年 京都新聞杯 スターマン
三冠馬を破った世紀の番狂わせ
単勝元返しを一蹴した藤田伸二
172

1994年 天皇賞・秋 ネーハイシーザー
GI3勝馬を破った快速馬
鞍上にプレゼントした唯一のGI
178

1994年 朝日杯3歳S フジキセキ
穴党の期待を完全に打ち砕いた
ノーステッキでGI制覇の衝撃
184

1994年 スプリンターズS サクラバクシンオー
短距離戦の未来を変えた圧巻のスピード
完璧に演じきった極上のフィナーレ
190

1994年 安田記念 ノースフライト
遅れてやってきたヒロインが
「マイル女王」に上り詰める
196

競馬note 4 障害トップジョッキー・星野忍
202

年度別 GI戦線「激闘譜」&データ
203

あとがき
219

執筆者紹介
222

1990年
有馬記念

オグリキャップ

日本中にただ1頭の馬の名がこだました！
アイドルホースが、伝説の馬に上り詰めた日

２００１年のブリーダーズＣではティズナウが前年に続く連覇を飾って９・11同時多発テロに悲しむアメリカ国内に大きな感動をもたらし、11年にはヴィクトワールピサが日本馬として初めてドバイＷＣを制して東日本大震災の傷が癒えぬ日本に勇気を与えた。競馬には、人の心を動かす大きな力があると思う。

私には自分を奮い立たせたい時に、決まって見返すレースがある。そのレースはいつ何度見ても、身体の奥底から色鮮やかな感情が湧き出て鳥肌が立ち、活力が溢れてくる。

１９９０年第35回有馬記念。言わずと知れたあのオグリキャップの引退レースである。

88年に地方競馬から中央競馬に移籍し、数々のタイトルを積み上げてきたオグリキャップだったが、90年秋に天皇賞・秋で初めて掲示板外となる６着に敗れると、ジャパンＣでは２ケタ着順に沈んでいた。

それまで彼を持ち上げていたマスコミが一転して、批判的な内容に変わっていった。「有馬

オグリ出るの!?」「オグリだめか」などといった見出しが連日のようにスポーツ紙の見出しを占領すると、あれだけ熱狂的だった世間の風向きも悲観的なものに変わり、ついには馬主のもとにオグリキャップの引退を迫る脅迫文が送り付けられる始末だった。

――オグリキャップは終わった。そんな空気感が日本に蔓延していたと言える。

そして迎えた有馬記念。オグリキャップが支持された4番人気5・5倍というオッズの中に、その勝利を確信していた投票がどれだけ含まれていただろうか。

多くの人の手に一時代を築き上げた日本競馬界きってのアイドルホースへの〝惜別の記念馬券〟が握り締められていたことはほぼ間違いなく、純粋な4番人気でないことはその場にいた誰もがわかっていた。

レース直前のゲート裏、最後の手綱を託された武豊は少し気の抜けた様子だったオグリキャップの首筋を叩き、「おい、お前オグリキャップやからな」と声をかけたという。するとオグリキャップは全盛期と同じように武者震いをしてみせ、勝負のゲートに入っていった。

「オグリキャップ引退レース。最後のレースです!」

その声とともに、スタートは切られた。中盤まではオグリキャップの引退レースということ以外、何の変哲もない時間が過ぎていったが、2周目の3コーナー、残り800mを通過したところで実況がゆっくり言葉を紡ぎ始めた。

「澄み切った師走の空気を切り裂いて、最後の力比べが始まります」
そのセリフがまるでスイッチだったかのように、空気が一変する。
オグリキャップが自身の意思で動いているかのように、馬なりのまま馬群の外目をスーッと上がっていく。
直線に向いた時、目の前に広がるその光景に中山競馬場が揺れ始めた。終わったはずの馬が、オグリキャップが先頭に立って後続各馬を引き連れた。
「ライアン！」
解説席の大川慶次郎氏が外からメジロライアンが迫り来ることを知らせたが、もはやレースを見ていた誰の目にもその姿は見えていなかった。
武豊が左手の握り拳を突き上げた。
「オグリ1着！　オグリ1着！　オグリ1着！　オグリ1着！」
実況がその場に起きた奇跡を繰り返し言葉にすると、中山競馬場に詰めかけた大観衆が沸点を迎え、膨張した。
目の前を駆け抜けたスターに最後の賛辞を送らんと、どこからともなく声が沸き、嗚咽が漏れ、拳が上がり、やがてそれは一つになって競馬場を包み込んだ。
オグリキャップは堂々としたキャンターでスタンド前まで戻り、約18万人のファンに自ら

の姿を目一杯見せつけた。そしてマスコミがカメラを構える前まで来て「さぁ、撮りたいだけ撮ったらどうだ」と言わんばかりに、澄ました顔して立ち止まってみせた。

その姿には自分がオグリキャップであるという圧倒的な自信と、これまで自分が独り占めしてきた目の前の光景をじっくり嚙み締めているような哀愁すら感じた。

敗れた馬の騎手たちが「オグリに勝たれたなら仕方がない」と口を揃えた。

大川慶次郎氏が「私なんかは、いの一番に謝らなければいけませんね」と口にした。

地方・笠松競馬場でデビューしたその馬は、地味な血統ながら確かな実力で勝利を積み重ね、中央競馬に殴り込んできた。中央のエリートたちを次々と打ち負かし、幾多のライバルたちと激戦を繰り広げた。

挫折を味わうことも怪我をすることもあったが、その都度立ち上がってリベンジを果たす「雑草魂」に人々は熱狂した。

最後には負かした馬の騎手も、辛辣だった解説者も、冷たい言葉を浴びせた世間の心さえもその虜にして競馬場を去っていった。そして四半世紀以上がたった今もなお、彼の勇姿は人々の心を動かし続け、元気や勇気を与えているのである。

「競走馬　オグリキャップ」という一つの伝説は、いつまでも色褪(あ)せることはない。

（秀間翔哉）

幾度と繰り返されてきた武豊と横山典弘のワンツー。GIにおいてはこのレースが初めてだった。

オグリキャップの功績は当時の日本記録である重賞 6 連勝や GI 競走 4 勝など、その優れた競走成績もさることながら、第二次競馬ブームにおいて競馬を単なるギャンブルから一つのエンターテイメントとして世間一般に浸透させたことにある。競馬グッズのはしりともいえる彼のぬいぐるみは当時どこの家庭にも置いてあったという。競馬場における来場者数の最多記録は彼が現役を引退する 1990 年の日本ダービー（19 万 6517 人）であることからもその影響の大きさを見ることができる。カメラを構えるファン、家族連れや女性、若者たちが競馬場に溢れている昨今の競馬の基礎をつくり上げたのはオグリキャップであった。

オグリキャップ

性別 牡

毛色 芦毛

生誕 1985年3月27日

死没 2010年7月3日

父 ダンシングキャップ

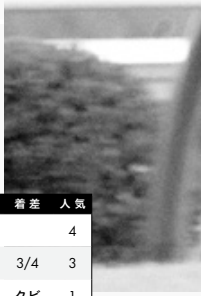
母 ホワイトナルビー（母父・シルバーシャーク）

調教師 鷲見昌勇（笠松） 瀬戸口勉（栗東）

生涯成績 22-6-1-3

獲得賞金 9億1111万円

勝ち鞍 有馬記念（2勝） マイルCS 安田記念 NZT4歳S
高松宮杯 毎日王冠（2勝） ペガサスS 毎日杯
京都4歳特別 オールカマー



第35回有馬記念（GI）
芝右2500m 晴 良 1990年12月23日 9R

着順	枠番	馬番	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム	着差	人気
1	4	8	オグリキャップ	牡6	56	武豊	2:34.2		4
2	3	5	メジロライアン	牡4	55	横山典弘	2:34.3	3/4	3
3	7	13	ホワイトストーン	牡4	55	柴田政人	2:34.4	クビ	1
4	2	3	オサイチジョージ	牡5	57	丸山勝秀	2:34.5	1/2	5
5	1	1	オースミシャダイ	牡5	57	松永昌博	2:34.6	3/4	12
6	2	4	ランニングフリー	牡8	56	菅原泰夫	2:34.6	クビ	9
7	1	2	ヤエノムテキ	牡6	56	岡部幸雄	2:34.7	クビ	6
8	5	10	ミスターシクレノン	牡6	56	松永幹夫	2:34.9	1	13
9	7	14	ゴーサイン	牡4	55	南井克巳	2:34.9	クビ	7
10	4	7	メジロアルダン	牡6	56	河内洋	2:34.9	ハナ	2
11	6	11	リアルバースデー	牡5	57	大崎昭一	2:35.0	クビ	8
11	8	15	カチウマホーク	牡5	57	的場均	2:35.0	同着	11
13	5	9	キョウエイタップ	牝4	53	柴田善臣	2:35.2	1.1/4	10
14	6	12	エイシンサニー	牝4	53	田島良保	2:35.3	3/4	16
15	3	6	サンドピアリス	牝5	55	岸滋彦	2:35.4	3/4	15
16	8	16	ラケットボール	牡6	56	坂井千明	2:36.0	3.1/2	14

第35回有馬記念（GⅠ）

芝2500m

1990年12月23日（日）

中山9R

9

（GⅠ）有馬記念（第35回）

（サラ4歳上(混)・オープン・馬齢）

◆ありまきねん　ファン投票選出馬中心のレース。有馬頼寧を記念

枠番	馬番	人気指数	父 / 馬名 / 母（母の父）	性齢	重量騎手	きゅう舎
白1	1	5	リアルシャダイ / オースミシャダイ / カズタネット（0勝）ミルジョージ	牡5	57松永昌	武邦
白1	2	39	ヤマニンスキー / ヤエノムテキ / ツルミスター（0勝）イエローゴッド	牡6	56岡部	荻野
黒2	3	20	ミルジョージ / オサイチジョージ / サチノワカバ（未登録）ファバージ	牡5	57丸山	土門一
黒2	4	14	サーペンフロ / ランニングフリー / サンマロ（1勝）ステューペンダス	牡8	56菅原泰	本郷

発走＝3時25分

芝・内 2500㍍

日刊スポーツ

平成2年（1990年）12月23日

勢いの4歳馬か実力の古馬か今日「有馬記念」

9 (GⅠ) 有馬記念

小波乱

中山

ゴーサイン

デスクの目

上昇度一番

アンバーシャダイをほうふつ

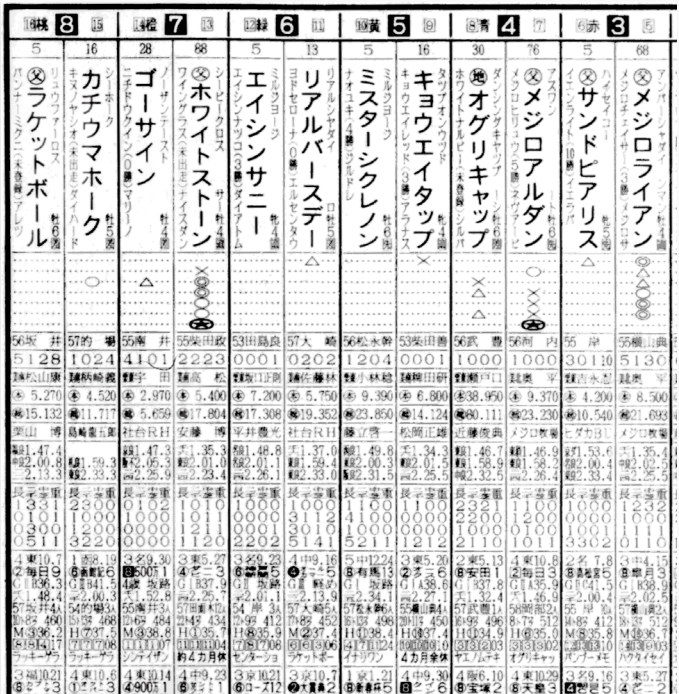
8R 上昇著しいラビリンスの連勝機⑤⑥①

前線記者の3番勝負

快速サイバーの4連勝だ

大器ユーワテイオーのV2

6R サクラヤマトオー



日刊スポーツ新聞社

今も現役の若手2人でワンツーフィニッシュ

ＧⅠ馬６頭が出走した 31 年前の有馬記念。１番人気ホワイトストーン、２番人気メジロアルダン、３番人気メジロライアンの上位３頭はいずれもＧⅠ未勝利馬だった。また今も現役を続けている３騎手のうち、武豊（優勝馬オグリキャップ）と横山典弘（２着メジロライアン）の２人で決着。当時から腕のある若手だったことがみえてくる。

1992年
菊花賞

ライスシャワー

走るたびに成長が見えたアスリート
スーパーステイヤーと呼ばれた馬

末端ではあるが、競馬マスコミに身を置いていると、パドックでの馬の見方について質問されることが多い。当たる馬券を教えろという質問より返答に窮するのだが、一般的には、落ち着いているとか、パドック*の外側を歩いているなどが好調のシグナルとされている。

しかし、馬の世話をしている厩務員に「絶好調だ！」と言われた馬があっさり負けたり、またその逆を経験した身からすると、〝いつも接している人だってわからないのだから、正しい答えなんてない〟が正直な思い。だから私は、「馬を見て感じたことを信じるのがいちばん」とアドバイスするようにしている。ただ、馬体からある程度の適性は判断できる。例えば距離。これは人間に当てはめるとわかりやすいのだが、１００ｍ走の選手とマラソンランナーの体型の違いが、競馬でいうスプリンターとステイヤーのそれと言っても過言ではない。前者は筋骨隆々で寸が詰まり気味。もちろん、カール・ルイスやウサイン・ボルトのような例外もいるが、総じて〝弾丸〟のような分厚い体。後者はムダな肉を極限まで削ぎ落とした

＊パドックの外側　他馬よりも外目を歩く馬は歩様に勢いを感じるケースが多い

シャープな体つき。サラブレッドはこれに胴長という特長が加わる。

バルセロナオリンピックが開催された１９９２年の牡馬クラシック戦線は、前年９月の新馬戦から３連勝で朝日杯３歳Ｓを制したミホノブルボンを中心に展開された。管理する戸山為夫調教師のもと、栗東トレーニングセンターの坂路コースで常識はずれのハードトレーニングを課された３歳チャンピオンは、馬体重こそ５００キロ前後だったが、鍛えあげられた鋼の筋肉を身にまとい、その容姿はサラブレッドというよりもサイボーグ。完成度と潜在スピードで同年代の馬たちをリードしていた。これとは対照的に、頼りなささえ感じさせる４５０キロに満たない小兵ながら、父リアルシャダイ譲りのスタミナを下地に距離延長で素質を開花させつつあったのがライスシャワー。８月のデビュー戦を勝ち上がった直後の新潟３歳Ｓこそ11着に敗れたが、続く芙蓉Ｓを４コーナー先頭の強気な競馬で制して２勝目をあげる。その後、骨折が判明し休養を余儀なくされるが、春のクラシックシーズンまでには故障も癒え、遥か先を走るミホノブルボンを追撃すべく爪を研いでいた。

両者の初対決は、重馬場で行われた皐月賞トライアルのスプリングＳ。２番手で無理に抑える競馬をして持ち前のスピードを半減させ、結果として辛勝になった朝日杯の反省から、他馬を速さで圧倒するレースに切り替えたミホノブルボンが圧勝。対するライスシャワーは、骨折休養明けもあり12番人気と低評価だったが、馬場を味方に４着と好走。この時の２頭の

着差は約9馬身。続く皐月賞もミホノブルボンが楽に逃げ切るのだが、ライスシャワーは約8馬身の8着。わずかではあるがライバルに近づいた。そして迎えたダービーは、皐月賞から直行して1番人気に支持されたミホノブルボンが逃げ切り、無敗の二冠制覇を達成するのだが、これに4コーナーで並びかけたのが16番人気のライスシャワー。直線ではミホノブルボンに突き放されてしまったが、マヤノペトリュースを差し返すガッツを見せて2着を確保し、勝ち馬との差は4馬身。打倒ミホノブルボンも夢ではない。そう思わせる走りだった。

両馬は無事に夏を過ごし、再戦の場は京都新聞杯。ダービーから体重を14キロ増やしたミホノブルボンに対し、セントライト記念を挟んだライスシャワーも同プラス8キロ。競走馬の本質が表われてくる4歳秋。ダービーと同様にライスシャワーは4コーナーでミホノブルボンに迫るのだが、春とは違い、ライスシャワーはそこから離されまいと食い下がる。逆転には至らなかったが、その差はわずか1馬身半。判官贔屓の私は、一戦ごとにその差を縮める成長力に驚き、三冠阻止の野望を小さな馬体に託して菊花賞のスタートを待った。

レースは玉砕覚悟のキョウエイボーガンが逃げ、ミホノブルボンは2番手。ただ、これまでと異なる競馬に戸惑ったか、無敗の二冠馬はレース前半に力んでしまう。片や本質がステイヤーのライスシャワーは、これを少し離れた位置で見る5番手をスムーズに追走し、4コーナーでミホノブルボンを射程圏に捉えると、直線では獲物を捕らえるヒョウのごとく襲い

かかり、1馬身1／4差をつけたところがゴール。テレビからは悲鳴にも似た歓声が聞こえてきたが、私は、「よくやったライスシャワー！」と絶叫。何度も跳ね返されてきた壁をようやく乗り越えた小兵の走りに、浪人生は胸を熱くした。

菊花賞のあとミホノブルボンは脚部不安を発症し、完治することなく引退したために両者の再戦は叶わなかったが、ライバル顔負けのハードトレーニングを課され、それに耐えたライスシャワーが春の天皇賞を二度も制したことで、鎬を削ったミホノブルボンの輝きが失われることはなかった。しかし、〝淀の申し子〟と言われたライスシャワーは、阪神大震災の影響で京都開催となった宝塚記念で非業の死を遂げる。この2頭の関係は、人間の世界に置き換えてもドラマにできるのではと思えるほどドラマチックであった。

トラックマン*になってから数年後のある日。ライスシャワーを管理していた飯塚好次厩舎に在籍していた調教助手が、追い切り時計を取りに記者席へ来た。眼前に広がる調教コースを見てそのベテランは、「今の調教師はキツイ攻め馬をしないよな…」とポツリ。それを横で聞いた私が、「これじゃあ、第二のライスシャワーは生まれませんかね」と返すと、「最期はかわいそうなことをしたけど、小さい体でよく頑張ったよ、あの馬は。GIの前は厳しい調教をしたからね」と、少し寂しそうに話してくれた。強い相手を倒すために身を削って走ったライスシャワー。彼は紛れもないアスリートだった。

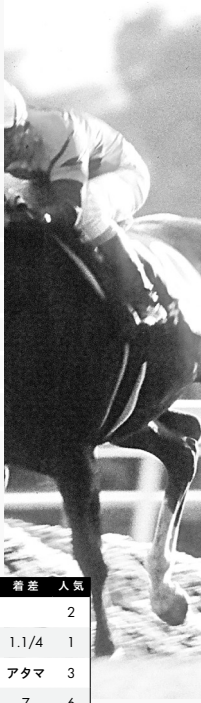
（久保木正則）

＊**トラックマン**　調教レポートや関係者のコメントを集める競馬新聞記者

レース前から展開をイメージし、ミホノブルボンの三冠を阻止した“スーパーステイヤー”。

GI 3 勝がすべて 3000 m以上だった「スーパーステイヤー」。昔はメジロマックイーンが、近年ではフィエールマンが同じ成績（菊花賞、天皇賞春 2 勝）を残している。また「三冠を阻止した馬」といえば、グレード制導入後はライスシャワーのほかにザッツザプレンティ（ネオユニヴァースが菊花賞 3 着）とソングオブウインド（メイショウサムソンが同 4 着）の 2 頭がいるが、二冠馬を 2 着に退けたのはライスシャワーのみだ。ステイヤー種牡馬として知られた父リアルシャダイは 1000 頭を超える産駒を輩出したが、最も活躍した馬こそライスシャワーで、2 番目は春の天皇賞でライスシャワーの 2 着だったステージチャンプだった。

ライスシャワー



性別 牡

毛色 黒鹿毛

生誕 1989年3月5日

死没 1995年6月4日

父 リアルシャダイ

母 ライラックポイント（母父・マルゼンスキー）

調教師 飯塚好次（美浦）

生涯成績 6-5-2-12

獲得賞金 6億6686万円

勝ち鞍 菊花賞　天皇賞・春（2勝）　日経賞

第53回菊花賞（GI）
芝右　外3000m　晴　良　1992年11月8日　10R

着順	枠番	馬番	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム	着差	人気
1	4	8	ライスシャワー	牡4	57	的場均	3:05.0		2
2	4	7	ミホノブルボン	牡4	57	小島貞博	3:05.2	1.1/4	1
3	5	10	マチカネタンホイザ	牡4	57	岡部幸雄	3:05.2	アタマ	3
4	1	2	メイキングテシオ	牡4	57	大崎昭一	3:06.4	7	6
5	8	18	ダイイチジョイフル	牡4	57	千田輝彦	3:06.7	2	8
6	7	15	セキテイリュウオー	牡4	57	田中勝春	3:06.8	1/2	13
7	3	5	ワカサファイヤー	牡4	57	小屋敷昭	3:07.0	1.1/2	10
8	1	1	ヤマニンミラクル	牡4	57	河内洋	3:07.0	クビ	5
9	7	13	ヤングライジン	牡4	57	佐藤哲三	3:07.2	1.1/4	12
10	3	6	グラールストーン	牡4	57	松永昌博	3:07.2	ハナ	9
11	8	16	スーパーソブリン	牡4	57	横山典弘	3:07.3	1/2	4
12	2	4	メイショウセントロ	牡4	57	上籠勝仁	3:07.3	クビ	18
13	8	17	セントライトシチー	牡4	57	南井克巳	3:07.5	1	15
14	5	9	ランディーバーン	牡4	57	菅谷正巳	3:07.6	1/2	16
15	7	14	バンブーゲネシス	牡4	57	武豊	3:07.7	クビ	7
16	6	12	キョウエイボーガン	牡4	57	松永幹夫	3:07.8	3/4	11
17	2	3	サンキンタツマー	牡4	57	石橋守	3:08.3	3	14
18	6	11	ヘヴンリーヴォイス	牡4	57	田面木博公	3:08.3	アタマ	17

コラム
3

特別インタビュー
早見和真（小説家）

一番好きな馬はツインターボ
逃げ馬に魅了された青年の破滅型馬券

『ザ・ロイヤルファミリー』でＪＲＡ賞馬事文化賞を受賞した、小説家の早見和真さん。好きになった馬、馬券との格闘など、競馬の持つ魅力についてたっぷりと語っていただきました。

©新潮社写真部

――早見さんが初めて競馬と対峙したのは、どのレースでしたか？

早見　オグリキャップの有馬記念でしたね。友だちのお父さんが馬主さんで「早見の馬券も買って来てやったぞ」と、オグリキャップの単勝千円をくれたんです。５倍くらいつけたんですが、中学生の僕にとって5千円は大きく、死ぬ気で応援してました（笑）。

――長いこと競馬をやられてますが、一番好きな馬はどの馬になりますか？

早見　ツインターボですかね。１９９３年の七夕賞。スタートからハイペースで飛ばして後続をぶっちぎったレースは、鮮烈な印象を与えてくれました。

高校時代は野球部で寮生活をしており、スポーツ新聞が何紙も届くんです。七夕賞の枠順をみると、逃げ馬が揃っている、ペースが速くなるだろうと書いてありました。福島の小回りコースで前半１０００ｍで１分を切るんじゃないかという中で、実際はツインターボが57秒台で行っているとトレーニングルームのラジオから聞こえてきて、すごく興奮しました。

逃げ切って勝った、という強烈な印象が残り、逃げ馬って面白いなあって。

もう一つ、ツインターボを好きな理由は、負けるときは殿で負けることなんですよね。逃げ馬を軸にして4着だったときの悔しさって異常じゃないですか。３頭に差されて4着なら、もういっそボロ負けして次人気なくせよって思っちゃうんです。

――わかります。前走2秒負けてても勝つのが逃げ馬最大の魅力ですもんね。

早見　１位かビリかはやっぱり魅力的ですが、そんな馬いないですもんね、今。だからかな、去年のジャパンＣのキセキは面白かった。残るんじゃないかって一瞬思いましたもん。

逃げ馬といえば、09年のエリザベス女王杯でクィーンスプマンテと、テイエムプリキュアの「行った行った」のレースで、ブエナビスタとの3頭でワイドのボックスを買っていたんです。２頭

のどっちかが残ると思ったけど、万が一2頭でハマったら死ぬほど後悔すると思い、ボックスにしたんです。

――2頭のワイド、2万3000円つけてます！　逃げ馬はある種「破滅型」ですが、早見さんにも破滅型のニオイを感じます。

早見　馬券はどう考えても破滅型です。これはカッコつけでも何でもなく、季節に1回、その破滅型がハマって大きなプラスを得るしか、競馬でプラスになる方法はない気がしていて。

菊池寛の名言に「ギャンブルとは絶対に手を付けてはいけないお金に手を付けたところから始まるものだ」というものがあるんです。それで思い出すのが大学時代、テイエムオペラオーとメイショウドトウの有馬記念。馬券的には一番興奮したレースです。

あのレースでオペラオーとダイワテキサスのワイド1点で生活費3万円をまるまる勝負して、翌年の大学の前期分の学費にしました。

とにかく貧乏時代で、実はこの日に彼女と別れているんです。忘れもしない2000年12月24日。クリスマスイヴに有馬記念に行くことを許せない、という彼女に「それなら一緒にいられない」って。中山ではなく東京競馬場で観てたんですよね。黄昏の夕陽に染められ、芝が枯れていて、影が長く伸びていて。そこに人がいて、馬がいるとその悲しさは共有できるんですけど、そ

れさえもないんですよ、有馬記念の東京競馬場には。丹沢の山並みが夕陽の逆光になって、すごくもの悲しいシルエットが浮かんでいました。

もう一つ、それまで僕の世代のスターといえば安室奈美恵さんでした。彼女が二十歳で紅白のトリを務めたとき、同い歳でこんなに輝いている人が現れたんだっていう衝撃を受けた人です。そうしたらその3年後、有馬記念をテイエムオペラオーで勝った和田竜二騎手も同じ歳だと知りました。業界も違うし、やっていることも違う。当時の僕なんかただの学生でしかなかったんですけれど、こんな舞台でこんなに輝く同じ歳の人間が出てきたっていうことに死ぬほど焦りました。

ああ、もうやばい、これ待ったなしだって思ったのを覚えています。馬券が当たったことはもちろん嬉しいですけど、これは50万くらいで喜んでいる場合じゃないぞって（笑）。

――それが名作『ザ・ロイヤルファミリー』につながったんですね。

早見　競馬をやっていなかった時期も、有馬記念だけは買っていました。有馬記念が好きだったから、ロイヤルファミリーがああいう形になったと思います。僕がダービー好きだったら、『優駿』（宮本輝、１９８６年）と同じように1回のレースしか書かなかったと思います。

――競馬の最大の魅力を「競技としては継承」と言われました。名馬が自分の血を子どもに継承するのもそうですし、ロイヤルファミリーでは「馬主の継承」を初めて知りました。

早見　亡くなった人の代わりに馬主になるというシステムは一つのカギでした。種牡馬もそうです。ツインターボは種牡馬として5頭だけ子どもがいるんです。ツインターボの父がアメリカ産のライラリッジという馬で、この貴重な血が今に残っていたらいいなと思って牝馬も辿っているんですけど、もういないんですよ。いないんですけど、今に通じていたら、多分猛烈に応援しているでしょうね。

――コロナの閉塞感があった中、早見さんがナビゲートをされたドキュメンタリー「競馬　2020年の奇跡～2頭の三冠馬誕生と世紀の一戦～」（NHK総合、BS1・2020年12月放送）で昨年のジャパンCを「競馬ファンへのギフト」と語ったフレーズが印象的でした。

早見　あり得ないですよね？　牡馬と牝馬で三冠馬が出て。それが揃って2年前の三冠馬に打ち倒されるって、なんか出来過ぎですよね。「ギフト」という言葉は、あの場でポンッと出てきたものでした。口にしてからすごくしっくりきたし、競馬ファンにも届いている感じがして、良かったなあって。いまの自分は競馬を書き切ったという気持ちが強いので、物語として競馬を書くことは、もうないと思います。

おわりに元高校球児で『ひゃくはち』という、高校野球をテーマにしたデビュー作を持つ早見さんに「90年代の名馬ベストオーダー」を選んでもらいました。

1番 レフト・エルコンドルパサー（強打の外国人）
2番 ピッチャー・ナリタブライアン（近代野球、大谷）
3番 ショート・グラスワンダー（4番と名コンビ）
4番 サード・スペシャルウィーク（3番と名コンビ）
5番 ライト・トウカイテイオー（長距離砲。古いタイプの5番打者）
6番 ファースト・ライスシャワー（打率良くないけど一発がある）
7番 セカンド・トロットサンダー（地方の公立高から現れたいぶし銀）
8番 キャッチャー・マヤノトップガン
（ナリタブライアンとのバッテリー＝名勝負阪神大賞典）
9番 センター・ツインターボ（快速で一発もある。*周東のイメージ）

（聞き手　小川隆行）

はやみ・かずまさ
1977年生まれ。08年『ひゃくはち』で作家デビュー。15年『イノセント・デイズ』で第68回日本推理作家協会賞受賞。『ザ・ロイヤルファミリー』で19年JRA賞馬事文化賞、20年山本周五郎賞をW受賞。『ぼくたちの家族』『小説王』など数多くの作品が映像化されている。

＊**周東佑京**　球界屈指の俊足を誇る。福岡ソフトバンクスホークス所属

1994年
高松宮杯

ナイスネイチャ

有馬記念5年連続出走
ブロンズコレクター、涙の重賞制覇

今から30年前。オグリキャップと武豊による競馬ブームで、競馬雑誌業界は空前の売れ行きを上げていた。中でも年末の有馬記念号は確実に売れるため、私が編集していた某誌では、出走予定の有力馬の特集を組んでいた。

パドック写真とともに「狙い目」を記すコーナーで、有馬記念のナイスネイチャをどう書いてきたか、古雑誌を引っ張り出してみた。

1年目（4歳時・現3歳、以下同）＝「京都新聞杯を勝ち菊花賞4着、鳴尾記念優勝で勢いあり」

2年目（5歳時）「秋の天皇賞（4着）からマイルCS（3着）というローテが微妙」

3年目（6歳時）「天皇賞15着、ジャパンC7着で昨年までの勢いなし」

この3年はいずれも3着だったが、当時は3連複や3連単が発売されておらず、狙い目の視点は「2着に入るか否か」。今ならば3着を意識した書き方になっただろう。

そして、この頃からナイスネイチャはブロンズコレクターと称されるようになっていった。

栗東入厩時のナイスネイチャは、他馬に噛みつこうとしたり、担当厩務員にケガをさせるなど気性が荒かった。若駒Sでトウカイテイオーの3着に敗れると、痛めていた橈骨を悪化させて放牧に出されたが、夏前に帰厩すると、気性の荒さは消えていたという。復帰2戦目の不知火特別を勝つと、900万条件（現2勝クラス）のはづき賞を連勝。小倉記念で古馬を破り重賞初制覇を遂げると、京都新聞杯で3歳（現2歳）王者のイブキマイカグラを破り菊花賞に出走してきた。

二冠馬トウカイテイオーこそ不在だったが、ダービー2着馬レオダーバン、イブキマイカグラ、皐月賞2着シャコーグレイドなどを相手に4着。続く鳴尾記念で重賞3勝目を挙げると、有馬記念に初出走。2番人気に支持されたナイスネイチャは1番人気メジロマックイーンをマークする形でレースを進めたが、4角で大外を回らされる不利も響きマックイーンに届かずの3着。翌年のGI制覇に期待が持てる内容だった。

4歳になると持病の橈骨悪化により春を全休。秋に毎日王冠3着で復帰すると秋の天皇賞を4着。続くマイルCS3着から有馬記念に出走、メジロパーマーの3着に粘った。

驚かされたのは翌年だ。秋の天皇賞15着、ジャパンC7着で「全盛時の力なし」と感じるも有馬記念ではトウカイテイオーの3着。劇的な復活劇を遂げたテイオーをつまみに酒を飲

みながら、「そういえば3着はナイスネイチャ」との話からさらに盛り上がった。

翌春も天皇賞、宝塚記念とも4着。出走を重ねても勝てないナイスネイチャが久しぶりの勝利を手にしたのが94年の高松宮杯だった。

ダービー馬ウイニングチケット、好調のスターバレリーナ、2走後にジャパンCを制するマーベラスクラウンなどが揃った一戦で、後方12番手を進んだナイスネイチャは3コーナー手前で仕掛けた。やや早いと思われたのも束の間、4コーナーでは先頭から4番手につけ、半馬身差でスターバレリーナを交わした。

2年半ぶりの勝利に中京競馬場の観客は大興奮。「ダメだろうな」と思いながら単勝を手にしていた私も、中京競馬場のスタンドで感動し、関係者に惜しみない拍手を贈った。

この勝利から、ナイスネイチャのファンは一気に増えた。秋の天皇賞7着、ジャパンC8着で「さすがに厳しい」と感じるも、編集部に寄せられるアンケートハガキは「ナイスネイチャの有馬記念が楽しみだ」といったコメントが増えた。

三冠馬ナリタブライアンが勝った4年目（7歳時）の有馬記念特集号では「3年連続3着は立派の一言。今年も3着を期待する」と個人的な願望を記したが5着がやっと。もはやこれまで、と思われたが、続く京都記念では59キロを背負って2着。

この数日後、私は栗東に出向き、ナイスネイチャの担当厩務員・馬場秀輝さんに話をうか

がった。

「ナイスネイチャが俺にケガをさせた時、なんか気持ちがわかってね。見知らぬ世界で不安だったんだと思う。でも、時間をかけていうことを聞いてくれるようになった。今は可愛くて仕方ないよ。まだまだいい走りをしてくれると思う」

それから数カ月後、有馬記念出走5年目（8歳時）を迎えると「5年連続出走は無事これ名馬。応援馬券を買いたい」と記した。結果はマヤノトップガンから遅れること2秒近い9着だったが、もはや結果などどうでもよかった。

往年の力を失ったナイスネイチャは、アルゼンチン共和国杯15着後、馬場さんの決断により引退。6年連続の有馬記念出走は叶わなかった。あの時有馬記念号に書こうとした内容は、今でもはっきりと覚えている。

「史上最高のバイプレイヤー。出走してくれてありがとう。無事にゴールインしてほしい」

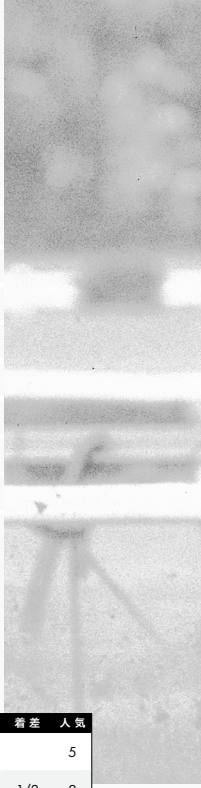
このレースから2年後、ナイスネイチャを可愛がっていた馬場さんが亡くなったと耳にした。ナイスネイチャがきっかけで知り合ったファンの結婚式に参加した帰路で交通事故に遭ったという。41歳の若さだった。

（小川隆行）

実に3年ぶりの重賞制覇。中京2000mで花開いたブロンズーコレクター・ナイスネイチャ。

36歳まで生きたナイスネイチャの母ウラカワミユキは、長寿牝馬として歴代3位の記録を誇っている。その血を引いたナイスネイチャも、2021年現在33歳と長寿の余生を送っている。日本最高齢馬は40歳まで生きたシャルロット（1979〜2019）。重賞勝ち馬ではマイネルダビテ（36歳）、シンザン（35歳）、ハギノカムイオー（34歳）、カツラノハイセイコ（33歳）、ミホシンザン（32歳）らが30歳を超えた。ナイスネイチャ産駒は17頭生まれたが、JRAでは3勝を挙げたのみだった。

ナイスネイチャ



性別 牡

毛色 鹿毛

生誕 1988年4月16日～

父 ナイスダンサー

母 ウラカワミユキ（母父・ハビトニー）

調教師 松永善晴（栗東）

生涯成績 7-6-8-20

獲得賞金 6億2358万円

勝ち鞍 京都新聞杯　鳴尾記念　高松宮杯　小倉記念

第24回高松宮杯（GⅡ）
芝左2000m　晴　良　1994年7月10日　11R

着順	枠番	馬番	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム	着差	人気
1	8	12	ナイスネイチャ	牡7	58	松永昌博	2:00.7		5
2	5	7	スターバレリーナ	牝5	56	河内洋	2:00.8	1/2	2
3	5	6	マーベラスクラウン	セ5	57	武豊	2:00.9	3/4	4
4	6	8	アイルトンシンボリ	牡6	57	岡部幸雄	2:01.0	3/4	3
5	4	5	ウイニングチケット	牡5	59	柴田善臣	2:01.7	4	1
6	6	9	ナリタファースト	牡5	57	河北通	2:01.8	1/2	11
7	4	4	エルカーサリバー	牝6	56	上村洋行	2:01.9	3/4	9
8	1	1	インターマイウェイ	牡5	57	熊沢重文	2:02.2	2	7
9	2	2	ルーブルアクト	牡7	58	清山宏明	2:02.5	1.3/4	10
10	7	11	ヤマニンフォックス	牡7	57	山田和広	2:02.5	ハナ	12
11	8	13	アラシ	セ6	57	土肥幸広	2:03.1	3.1/2	6
12	3	3	ホクセイアンバー	牡6	57	小原義之	2:03.1	アタマ	13
13	7	10	アンバーライオン	牡5	57	田所秀孝	2:04.1	6	8

1990年のGI競走

バブル景気に沸く日本にオグリキャップをはじめとするスターホースが現れ、中央競馬は空前絶後の入場者数を記録、競馬ブームは頂点を極める。

構成／齋藤翔人

競走名／開催日	優勝馬／騎手・調教師	短評
桜花賞 4月8日　阪神　芝1600m	アグネスフローラ 河内洋　長浜博之（栗東）	母アグネスレディーと二代クラシック制覇の快挙。河内騎手は、5年間で3度目の桜花賞制覇。「牝馬の河内」の名を確たるものに。
皐月賞 4月15日　中山　芝2000m	ハクタイセイ 南井克巳　布施正（栗東）	芦毛ブームの名脇役。未勝利戦からの6連勝で一冠目奪取。ハイセイコーと父仔制覇達成。ダービーでは、天才・武豊騎手が騎乗。
天皇賞・春 4月29日　京都　芝3200m	スーパークリーク 武豊　伊藤修司（栗東）	前年覇者イナリワンとのマッチレースを制し、天皇賞秋春連覇。武豊騎手は、21歳にして天皇賞・春を連覇、天皇賞3連覇の快挙。
安田記念 5月13日　東京　芝1600m	オグリキャップ 武豊　瀬戸口勉（栗東）	休み明けも関係なし。天才との初コンビで、コースレコードの完勝。GI3勝目、重賞11勝目。獲得賞金も当時の歴代1位に。

優駿牝馬（オークス）

5月20日　東京　芝2400m

エイシンサニー

岸滋彦　坂口正則（栗東）

レースレコードで、無敗の桜花賞馬を内から差し切り勝ち。3年目の岸騎手は、前年のエリザベス女王杯に続き2年連続GⅠ制覇。

東京優駿（日本ダービー）

5月27日　東京　芝2400m

アイネスフウジン

中野栄治　加藤修甫（美浦）

ダービーレコードで、カブラヤオー以来の逃げ切り。19万6517人は、不滅のJRA史上最高入場者記録。伝説のナカノコール。

宝塚記念

6月10日　阪神　芝2200m

オサイチジョージ

丸山勝秀　土門一美（栗東）

若武者・岡騎手を背にしたオグリキャップに完勝し、人馬ともGⅠ初制覇。同馬の馬主と、厩舎の先輩カツラギエースの馬主は親子。

天皇賞・秋

10月28日　東京　芝2000m

ヤエノムテキ

岡部幸雄　荻野光男（栗東）

同コースで制した皐月賞に続くGⅠ2勝目をコースレコードで飾る。岡部騎手は、同レース初勝利。1番人気オグリキャップは6着。

菊花賞

11月4日　京都　芝3000m

メジロマックイーン

内田浩一　池江泰郎（栗東）

メジロはメジロでも、ライアンを破ったのはマックイーン。内田騎手はGⅠ初制覇。ホワイトストーンと芦毛の1、2着。

エリザベス女王杯

11月11日　京都　芝2400m

キョウエイタップ

横山典弘　稗田研二（美浦）

前週のメジロライアンのリベンジを果たした横山典弘騎手がGⅠ初制覇。ゴール手前の派手なガッツポーズも話題に。

マイルチャンピオンシップ

11月18日　京都　芝1600m

パッシングショット

楠孝志　橋田満（栗東）

CBC賞に続いて本命バンブーメモリーを破り、楠騎手、橋田調教師ともにGⅠ初制覇。しかし次走のスプリンターズSで…。

ジャパンカップ

11月25日　東京　芝2400m

ベタールースンアップ（豪）

M・A・クラーク　D・ヘイズ（豪州）

前年のホーリックスに続く南半球産馬の勝利で、3着までを外国調教馬が独占。日本調教馬では、ホワイトストーンが最先着（4着）。

阪神3歳ステークス
12月9日　京都　芝1600m

イブキマイカグラ
南井克巳　中尾正（栗東）

京都での開催。ポッカリ開いた内ラチ沿いから一気に差し切ってのレコード勝ち。次年度からは牝馬限定戦として行われることに。

朝日杯3歳ステークス
12月9日　中山　芝1600m

リンドシェーバー
的場均　元石孝昭（美浦）

函館3歳S2着からのぶっつけで挑んだ外国産馬が、マルゼンスキーのレコードを0秒4更新。的場騎手は、これがGI2勝目。

スプリンターズステークス
12月16日　中山　芝1200m

バンブーメモリー
武豊　武邦彦（栗東）

GI昇格初年度。2番人気パッシングショットの大出遅れを尻目に、日本レコードで差し切り勝ち。調教師・騎手の親子制覇。

有馬記念
12月23日　中山　芝2500m

オグリキャップ
武豊　瀬戸口勉（栗東）

奇跡の復活で引退の花道を飾る。中山競馬場史上最高177,779人からの大オグリコール。日本競馬史に燦然と輝く伝説。

中山大障害・春　4月7日　中山4100m　**バンフレット**　嘉堂信雄　田中良平（栗東）

中山大障害・秋　12月22日　中山4100m　**ワカタイショウ**　星野忍　嶋田功（美浦）

JRA賞

年度代表馬・最優秀5歳以上牡馬　**オグリキャップ**

最優秀3歳牡馬　**リンドシェーバー**

最優秀3歳牝馬　**ノーザンドライバー**

最優秀4歳牡馬　**アイネスフウジン**

最優秀4歳牝馬　**アグネスフローラ**

最優秀5歳以上牝馬　**パッシングショット**

最優秀父内国産馬　**ヤエノムテキ**

最優秀スプリンター　**バンブーメモリー**

最優秀ダートホース　**カリブソング**

最優秀障害馬　**ワカタイショウ**

最優秀アラブ　**該当馬なし**

＊馬齢表記は当時のものによる（以下同）

1991年のGI競走

バブルの崩壊が始まるも、JRAの年間売上額はまたも2ケタ伸長を記録。
かつての名馬たちの産駒が大活躍したこの年、
年度代表馬の座を射止めたのは、〝皇帝〟の初年度産駒。

競走名／開催日	優勝馬／騎手・調教師	短評
桜花賞 4月7日　京都　芝1600m	シスタートウショウ 角田晃一　鶴留明雄（栗東）	2年連続で無敗の桜の女王が誕生。角田騎手は、デビュー3年目で嬉しいGI初勝利。2着ヤマノカサブランカで波乱の決着に。
皐月賞 4月14日　中山　芝2000m	トウカイテイオー 安田隆行　松元省一（栗東）	父シンボリルドルフに続き、無敗でのクラシック戴冠。デビュー20年目の安田隆行騎手は、松元調教師とともに念願のGI初制覇。
天皇賞・春 4月28日　京都　芝3200m	メジロマックイーン 武豊　池江泰郎（栗東）	再びメジロライアンとホワイトストーンに勝利し、古馬日本一の座を獲得。天皇賞・春を三連覇の武豊騎手は「平成の盾男」襲名。
安田記念 5月12日　東京　芝1600m	ダイイチルビー 河内洋　伊藤雄二（栗東）	父トウショウボーイ、母ハギノトップレディの超良血馬が、ついに覚醒してGI初制覇。河内騎手は、2年連続牝馬でGI勝利。

優駿牝馬（オークス）

5月19日　東京　芝2400m

桜花賞は落鉄に泣いた「裸足のシンデレラ」がリベンジ逃走劇で樫の女王戴冠。デビュー6年目の松永幹夫騎手がGI初制覇。

東京優駿（日本ダービー）

5月26日　東京　芝2400m

皐月賞に続く無敗での父仔二冠制覇も、レース後に骨折が判明し菊花賞は断念。三冠達成はならずも、この年の年度代表馬を受賞。

宝塚記念

6月9日　京都　芝2200m

先行策でマックイーンを振り切り、悲願のGI初制覇。横山典弘騎手が言い続けてきた「ライアンが一番強い」をついに体現。

天皇賞・秋

10月27日　東京　芝2000m

マックイーンが6馬身差で1位入線も、他馬の進路を妨害し18着降着。「穴男」江田騎手のGI初制覇は、3番人気での勝利。

菊花賞

11月3日　京都　芝3000m

前哨戦3着に敗れたダービー2着馬が、3番人気に反発する意地の勝利でGI制覇。マルゼンスキー産駒2頭目の菊花賞馬に。

エリザベス女王杯

11月10日　京都　芝2400m

夏の上がり馬が3連勝でGI制覇も、レース中に負傷しこのまま引退、繁殖入り。『悲劇の天才』岡騎手のGI初制覇。

マイルチャンピオンシップ

11月17日　京都　芝1600m

ライバルのダイイチルビーを下してGI初制覇。故障でビッグタイトルに手が届かないまま引退した父ビゼンニシキに捧げる勝利。

ジャパンカップ

11月24日　東京　芝2400m

スローからの瞬発力勝負で、1番人気のメジロマックイーンに完勝。2年後、日本で種牡馬入りし、2002年に中国へ。

イソノルーブル

松永幹夫　清水久雄（栗東）

トウカイテイオー

安田隆行　松元省一（栗東）

メジロライアン

横山典弘　奥平真治（美浦）

プレクラスニー

江田照男　矢野照正（美浦）

レオダーバン

岡部幸雄　奥平真治（美浦）

リンデンリリー

岡潤一郎　野元昭（栗東）

ダイタクヘリオス

岸滋彦　梅田康雄（栗東）

ゴールデンフェザント（米）

G・スティーヴンス　C・ウィッティンガム（米国）

阪神３歳牝馬ステークス

12月1日　阪神　芝1600m

ニシノフラワー

佐藤正雄　松田正弘（栗東）

4戦全勝での女王戴冠。佐藤正雄騎手は23年目、名門・西山牧場は開業25年目で念願のGⅠ初勝利。牝馬限定となった初年度。

朝日杯３歳ステークス

12月8日　中山　芝1600m

ミホノブルボン

小島貞博　戸山為夫（栗東）

スパルタ調教で鍛えられた「坂路の申し子」が、3戦全勝でデビュー21年目の小島貞博騎手とともにGⅠ初制覇。

スプリンターズステークス

12月15日　中山　芝1200m

ダイイチルビー

河内洋　伊藤雄二（栗東）

4馬身差の圧勝で、安田記念との2階級制覇達成。1番人気ケイエスミラクルは、直線に向いてすぐ無念の故障発生、競走中止。

有馬記念

12月22日　中山　芝2500m

ダイユウサク

熊沢重文　内藤繁春（栗東）

年初の金杯を勝った14番人気馬が、「これはびっくり」の実況とともに、メジロマックイーンを差し切る大波乱で単勝万馬券。

中山大障害・春　4月6日　中山4100m　シンコウアンクレー　田中剛　二本柳俊一（美浦）

中山大障害・秋　12月21日　中山4100m　シンボリモントルー　成田均　田中和夫（美浦）

JRA賞

年度代表馬・最優秀4歳牡馬・最優秀父内国産馬　**トウカイテイオー**

最優秀3歳牡馬　**ミホノブルボン**

最優秀3歳牝馬　**ニシノフラワー**

最優秀4歳牝馬　**シスタートウショウ**

最優秀5歳以上牡馬　**メジロマックイーン**

最優秀5歳以上牝馬・最優秀スプリンター　**ダイイチルビー**

最優秀ダートホース　**ナリタハヤブサ**

最優秀障害馬　**シンボリクリエンス**

最優秀アラブ　**アフェクトダンサー**

執筆者紹介（五十音順）

浅羽晃　あさば・あきら

編集プロダクション勤務を経て1993年よりフリーライター。競馬は1983年秋から始め、タイミングよく翌年グレード制に移行。好きな馬は天才少女ダスゲニー。

緒方きしん　おがた・きしん

1990年北海道生まれ。競馬コラムサイト『ウマフリ』の代表を務める。『netkeiba』、『競馬の天才！』、『SPAIA』などに寄稿。好きな馬はレオダーバンなど。

小川隆行　おがわ・たかゆき

1966年千葉県生まれ。牡55。ライター&編集者。バーテンダーや運送業などを経て競馬雑誌編集者になる。以来30年にわたり騎手や調教師、予想家に取材を重ねてきた。

勝木淳　かつき・あつし

競馬ライター。優駿エッセイ賞2016グランプリ受賞。SPAIA競馬、競馬コラムサイト『ウマフリ』、競馬雑誌『優駿』などに寄稿。Yahoo!ニュース公式コメンテーター。

久保木正則　くぼき・まさのり

1997年日刊競馬新聞社に入社後、1年間の編集部勤務を経て美浦支局へ配属。調教タイムを探りつつ、その動きを見極める日々を送る。グリーンチャンネルパドック解説者。

齋藤翔人　さいとう・とびと

京都府出身。大学卒業後、サラリーマン生活を10年以上送るも、競馬に関わる仕事がしたい気持ちを抑えきれず脱サラ。競馬コラムサイト『ウマフリ』で重賞回顧を連載中。

榊俊介　さかき・しゅんすけ

1984年東京生まれ。アメリカ留学経験あり。酒を飲みながらの競馬談議が心の栄養。柴田善臣騎手のクラシック制覇を夢見る。

並木ボラオ　なみき・ぼらお

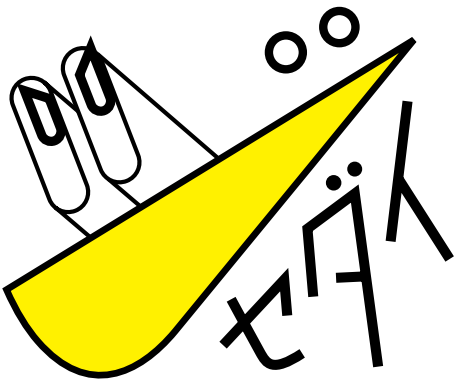
馬券とはまた別の競馬の魅力を伝えたい思いから、2019年秋より『ウマフリ』に寄稿。ビッグテーストの走りを観て以来、ジャンプレースにも心酔している。

秀間翔哉　ひでま・さねちか

1997年生まれ。ビワハヤヒデに競馬を学び、デュランダルに心を奪われ、ハルーワソングの牝系を追い続ける1人の競馬ファン。現在は主に『ウマフリ』への寄稿により競馬への思いを語る。

和田章郎　わだ・あきお

1961年生まれ。大学卒業後に中央競馬専門誌ケイバブックに入社。「競馬こそ究極のエンターテインメント」がモットー。



君は、セダイ

何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント
著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研
若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み
既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!